

---

---

## 第1部　－2005年11月－

---

---

### 上海における日中関係と魯迅の旧居

—— 1963年8月と2005年11月 ——

儀我　壮一郎

#### I　上海の歴史と上海から見た日中関係寸描

2005年11月3日から6日までの上海訪問で学ぶところは、きわめて大きかった。柴田弘捷団長、村上俊介秘書長はじめ団員各位とJETRO、みずほコーポレート銀行、上海岡野服装有限公司など訪問先のすべての関係者に感謝する。国学院大学文学部の林和生教授には、「公共交通機関を使った一日巡検コース」を設定し案内していただいた。充実した数々の御教示に心から御礼申し上げたい。

さて、ここで1931年までの上海の歴史を一瞥しよう。

上海は、5000年前には海の中にあった。長江デルタの形成によって海の上の陸地になり、「海中」から「上海」となった。

上海の一帯は、紀元前5000年ないし4000年からの長江デルタ形成により、随の時代の600年頃、ほぼ陸地になった。長い長い年月によって誕生したのである。北宋の977年頃、龍華寺の塔が再建された。南宋の1267年「上海鎮」がおかれ、1292年「上海県」となった。明の1553年上海城壁建設。1577年豫園完成。清の1816年「上海県」の人口約53万人。1842年のアヘン戦争中に、英国が上海を一時占領。1843年南京条約により通商港として開放。ジャーディン・マセソン商会（怡和洋行）上海支店開設。1845年最初の土地章程締結。イギリス租界の始まり。1849年フランス租界成立。1853年アメリカ租界成立。1854年租界工部局設置。1856年外擺渡橋（ガーデン・ブリッジ）かかる。1860年太平天国軍上海城を攻撃するも失敗。1862年徳川幕府千歳丸（高杉晋作が乗船）を上海に派遣。1865年香港上海銀行（滙豊銀行）上海支店開設。1872年日本領事館開設。1874年三菱商会上海支店開設。1875年東本願寺別院開設。1889年内外綿会社上海出張所開設。1894－95年日清戦争。1900年義和団事件。1904年光復会結成。1911年辛亥革命。1912年中華民国成立。1914－18年第1次世界戦争。1915年、日本対中国21カ条要求。1917年ロシア社会主義革命。1919年五・四運動。1921年上海で中国共産党成立。1924年第1次国共合作。1925年五・三〇事件。1927年4月蒋介石の反共クーデター。1931年日本の東北侵略（「満洲事変」）。（丸山昇『上海物語』集英社、1978年、講談社学術文庫版、2004年7月、259－260ページなど

による)。

以上の略史を前提として、日中関係の検討に移る。

上海という窓から、日中関係の歴史を垣間見るために、まず丸山昇氏の名著『上海物語』(前出)から引用する。簡潔明快で含著に富む。

「……戦前は長崎経由で神戸との間に、長崎丸・上海丸の二隻が六日間で往復しており、長崎―上海間の所要時間は、ほぼ二六時間だった。戦前、上海に渡るには、旅券もビザもいらなかったし、国鉄の窓口でも船を含む通し切符が買えた。中国語や中国文学を学ぶ大学生は、上海で夏休みを過すと、東京で下宿しているより安上りですんだ。在住日本人も日中戦争開戦時に約三万人、敗戦によって、一時はほぼゼロに等しくなったが、国交回復後しだいに増え、一九八七年現在、商用・留学など、三ヵ月以上の上海在住者は約八五〇名という。総領事館がおかれている。

……上海の歴史は租界と不可分であり、それは欧米列強による中国半植民地化の象徴にほかならなかったが、後発の帝国主義国として中国市場に『進出』して行った日本も、上海ではつねに英・米の後塵を拝していたとはいえ、やはり彼らと同じ道を歩いていたばかりではなく、後発であるがゆえの野蛮さをもっていたといわねばならない」(文庫版、12―13ページ)。

武田泰淳の小説『上海の螢』のなかで、中国の作家陶晶孫は、「T氏」として、こう語っている。

日本は、やらずぶったくりだよ。くれたのは日本精神だけさ。米英人は、ギブアンドテイクだ。

「中国の知識人のなかでも、もっとも深く日本を知り、また日本を愛した陶氏の言葉だけに、これには近代の日中関係の歴史を凝縮する重みがある」(丸山昇、前出、12―14ページ)。

1874・明治7年には三菱商会、76年に三井洋行がそれぞれ上海支店を開設していたが、日本の経済進出の本格化は、日清・日露戦争前後からである。1889・明治22年、内外綿会社が上海出張所を設けた。当初は中国産の綿花輸入が主な業務だったが、紡績業にも手を広げ、1909・明治42年に上海工場建設を決定した。1893・明治26年には横浜正金銀行(東京銀行の前身)が上海出張所を設けた。上海在住の日本人は、1877・明治10年ごろには100人前後であったが、日露戦争後急速に増加し、第1次世界大戦中の1915年当時、すでに1万人を超え、日中戦争開戦時には3万人に達していた。1937年7月の日中全面戦争開始により、8月中に約2万5000人が帰国、翌年度からまた上海にもどり始め、1939年1月には3万7000余を数えた(同上、52―56ページと218ページによる)。なお、すでに1875・明治8年、三菱は4隻の汽船で、横浜―上海間に週1回の定期航路を開設していた。

さて、日本の敗戦後60年近くを経過した2004・平成16年10月の上海における日本人在留者

（３ヵ月以上の長期滞在者と永住者を含む）は３万４１２２人であり、ほぼ、日中戦争開戦時の人数に近い。同じ時期に、日本人学校の生徒数は、小学生１、４７２人、中学生３０４人、教員８１人（うち６２人が日本人）である（『上海市概況』１１ページ）。

『２００４年上海市国民経済と社会発展統計公報』（上海市統計局ホームページ）によれば、上海市の面積は６、３４０．５ｋｍ<sup>２</sup>（群馬県の６、３６３．２ｋｍ<sup>２</sup>とほぼ同じ）、２００４年の戸籍人口は１、３５２．４万人、常住人口は１、７４２．２万人（戸籍をもたない人口を含む）、自然増加率は１９９３年からマイナスが続いている。他地域からの人口流入状況が窺える。２００４年のＧＤＰは、第１次産業が９６．７１億元（１．３％）、第２次産業が３、７８８．２２億元（５０．８％）、第３次産業が３、５６５．３４億元（４７．９％）である。第３次産業は、金融ベースで、小売・飲食、金融、不動産が上位を占めている。

上海への主要投資国・地域は、表１のとおりで、国別には、２００１年以後、日本が件数・金額ともに首位を占めている。このことにもとづいて、現在日本の金融機関が、上海で優位を占めつつある。

表１ 上海への主要投資国・地域（２００４年）

国・地域	２０００年		２００１年		２００２年		２００３年		２００４年	
	億ドル	件	億ドル	件	億ドル	件	億ドル	件	億ドル	件
日本	７．０５	２３７	１３．２４	３４２	１０．６０	４６７	１２．７２	７８８	１５．３３	７３０
中国香港	９．４４	４１９	７．７５	４７９	１６．８１	６１９	２０．２８	８６４	２４．４８	８８４
米国	５．７８	２５６	５．９８	２６３	８．３４	３３２	８．５１	４６８	７．９７	４７９
台湾	１．６５	２２５	３．５６	４１２	４．６９	４２５	８．２７	４２７	３．０７	３２６
シンガポール	２．１３	９７	３．１０	１２９	５．２６	１４９	６．１４	２７９	６．９０	２７１

（出所）上海貿易外経統計月報２００４．１２『上海市概況』６ページ。

『上海市概況』によれば、上海への進出企業として表２が例示されている。関西系の企業が目立つことは特徴の１つである。ただし、１８４０－４２年のアヘン戦争以来、強固な地位を占めてきた英国企業とくに英国のアジア金融の総本山であった香港上海銀行などを追加し、注目する必要がある。バンドの旧滙豊銀行の建物は、新中国成立後、上海市人民政府および中国共産党上海市委員会の建物になっていたが、「改革・開放」後、また、滙豊銀行（香港上海銀行：ＨＳＢＣ）に売り渡された。この建物は、１９２３年に新ギリシア風といわれる７階のビルとして新築され、英国が当時、「スエズ運河からベーリング海峡に至るまでの極東でもっとも凝った建物」と誇った建物だった（丸山昇、前出、３６ページ）。

表2 上海への進出企業

日系	花王、鐘淵化学、サントリー、三洋電機、ローソン、日本通運、三菱電機、村田電子、YKK、ソニー、シャープ、日本ペイント、森ビル、三井造船、日立、松下、アルプス、オムロン、フジタ、NEC、東京三菱、みずほ、三井住友
その他	HP、モトローラ、GE、AT&T、GM、IBM、インテル、J&J、ロマンス、ユニシス、ジレット、アーサー&アンダーソン（米） フィリップス（蘭）、LG、三星、大宇（韓国）、トムソン、新鴻基（中国香港）、ピエールカルダン、アルカテル（仏）、遼東（台湾）、CP（タイ）、シンドラー（スイス）等

（出所）『上海市概況』4ページ。

## II 1963年の訪中の概況と上海

私は、1963・昭和38年8月、敗戦後の初めての中国訪問の機会を得た。1949年の中華人民共和国成立以後、1963年にいたる日中間の人的交流と貿易の状況は、表3・4のとおりであり、「冷戦体制」下の紆余曲折に満ちた多難な日中関係を鋭く反映している。この時期の上海の状況は、想像に難くない。中国では、1958年から「大躍進」政策が実施され、農村では人民公社化が進められていた時期であり、都市を中心とする経済の主軸は、国有国营企業と手工業協同組合であった。1963年には、私営商工業の社会主義的改造がすでに基本的に完了していたのである。詳細は、儀我『現代中国の企業形態』（森山書店、1959年）を参照していただきたい。

ここで、1931年以後の略史を見ておこう。

1932年、上海で十九路軍勇戦。1934－35年、紅軍の大長征（瑞金を出発・延安に到着）。1935年、十二・九抗日運動。1936年12月、西安事変。1937年7月廬溝橋事件（日中全面戦争へ）。1945年、日本敗戦。1946年1月国共停戦協定、7月国共内戦。1949年10月1日中華人民共和国成立。1950年6月朝鮮戦争開始。1953年7月朝鮮休戦協定。1954年、中国・インド平和五原則発表。1960年ソ連技術者中国から引揚げ。

43年前の1963（昭和38）年8月24日、私は、日中友好協会学習活動家代表団の一員として、はじめて上海を訪問した。

この代表団は、7月26日、神戸港で東光丸に乗船、7月31日、清沽に上陸、天津を経て北京に到着した。往年の遣隋使・遣唐使を想起せざるをえない船旅であった。

8月1日、北京で歴史博物館見学の後、1万人参集の原水爆世界大会支持首都集会に参加。人民大会堂で周恩来総理、陳毅副総理、郭沫若氏、李德全女史、廖承志氏たちと会見した。北

京では、革命博物館（含、雷鋒展覧会）、軍事革命博物館、民族文化宮、北京大学、北京放送局、外文出版社、などを見学。また、勇龍桂、劉大年、李新、徐浄武、李踐為、陳道各氏から、それぞれ中国経済、中国革命史、青年問題、毛沢東思想に関する講話があり多くを学んだ。

8月9日には、陳毅副総理と内外情勢について会談する機会を得、①ソ連のフルシチョフ修正主義批判、②部分核停条約の問題点、③中国の核兵器開発の決意、④アメリカ帝国主義の位置づけなどを含む諸問題が論じられた。迫力に満ちた講話であった。陳毅氏は新中国の初代上海市長である。

8月14日、空路北京から西安に移動、第八路軍弁本拠跡、西北第四綿紡績工場、陝西省博物館、華清宮などを見学した。華清池の西安事変（1937・昭和11年12月12日、張学良・楊虎城による蒋介石に対する兵諫。抗日統一戦線結成・第2次国共合作の画期となる）の史蹟は、張作霖・学良父子を身近かに知る私にとってとくに印象的であった。

8月17日、空路、西安から延安に移動、延安革命博物館、毛沢東、朱徳、周恩来その他の住居跡、日本人工農学校跡、棗園などを見学。

表3 日本と中国の人の往来

年 度	日本から中国へ		中国から日本へ	
	団体数	人 数	団体数	人 数
1949	1	6人	0	0人
50	0	0	0	0
51	5	9	0	0
52	11	50	0	0
53	16	139	0	0
54	21	197	1	10
55	52	847	4	100
56	108	1,182	7	142
57	133	1,234	16	145
58	不明	594	5	93
59	20	191	0	0
60	42	629	1	13
61	30	557	12	85
62	32	619	10	78
63	79	1,752	23	280
64				

（出所）『新中国年鑑』（極東書店）  
1964年版による。351ページ。

表 4 第 2 次世界戦争前と後の日中貿易

年 度	わが国の対中国輸出		わが国への中国からの輸入		日 本 の 対外貿易
	実 績	輸出総額に占める比重	実 績	輸入総額に占める比重	
1930－39 年平均	(1,000 <sup>F</sup> ₯) 168,644	21.6%	(1,000 <sup>F</sup> ₯) 115,631	12.4%	(億 <sup>F</sup> ₯) 18.52
1946	3,552	4.6	3,612	1.6	3.07
47	10,164	5.9	5,016	1.0	6.97
48	4,080	1.6	24,828	3.6	9.42
49	3,114	0.6	21,756	2.4	14.15
50	19,632	2.4	39,636	4.1	17.94
51	5,828	0.4	21,606	1.1	34.08
52	599	0.05	14,903	0.7	30.02
53	5,539	0.4	29,700	1.2	36.84
54	19,097	1.2	40,770	1.7	40.29
55	28,232	1.4	80,482	3.3	44.82
56	67,344	2.7	83,873	2.6	57.30
57	60,485	2.1	80,482	1.9	71.42
58	51,094	1.8	54,743	1.8	59.10
59	3,646	0.1	18,786	0.5	70.55
60	2,724	0.1	20,729	0.5	85.46
61	16,673	0.4	30,885	0.5	100.46
62	38,457	0.8	46,020	0.8	
63	62,417	1.1	74,599	1.1	
64					

- (注) 1. 大蔵省通関実績により作成したもの。  
 2. 1946－48年は台湾を含む。1946年は1945年9－12月を含む。  
 3. 中国からの輸入は、第3国経由を含む。  
 (出所) 高市・富山『日中問題入門』146ページ、  
 『新中国年鑑』1964年度版328ページその他による。

8月19日、空路、延安から西安に移動、2つの工場と馬旗寨人民公社などを見学。

8月21日、洛陽駅に到着、洛陽ボールベアリング工場、第一トラクター製造工場を見学。23日、鉄道で上海に移動。

8月24日、上海駅着。上海市人民政府訪問、上海革命博物館（第一回中国共産党大会の建物）、魯迅の墓（供花）、魯迅記念館、魯迅旧居、上海市塘湾人民公社、楊樹浦発電所、閔行区の新住宅街を見学。

8月27日、空路、上海から北京に移動。

8月30日、北京駅発、天津着。市内を見学。31日、天津塘沽新港を見学の後、東光丸で大連港に移動。

9月1日、大連港着。自然博物館、老虎灘療養所見学。2日、東光丸で門司向出航、5日、門司港着。

以上の日程の中での、映画・演劇・音楽の鑑賞、万里の長城、龍門石佛等々の見学については、すべて省略した。

さて、1963年7－9月の訪中において見聞き研究調査した成果は、次の諸論文で発表した。

- ①中国における国営企業と人民公社の特質、大阪市立大学『経営研究』68号、1963年9月。
- ②社会主義企業の発展過程、上林貞治郎編『社会主義の企業経営』ダイヤモンド社、1963年11月。
- ③水道・日本と中国『住民と自治』1964年12月号。
- ④社会主義経営学、古川栄一・高宮晋編『現代の経営学』有斐閣、1964年4月。
- ⑤中国における国営企業発展過程の特質、大阪市立大学『経営研究』73号、1964年9月。
- ⑥労働者の生活と国営企業、山下龍三・儀我壮一郎・梅川勉『中国の国民生活』法律文化社、1965年5月。
- ⑦中国の国営企業における所有制と管理制度、大阪市立大学『経営研究』81号、1966年1月。
- ⑧反帝国主義統一戦線の論理、『思想』（岩波書店）1966年1月号。
- ⑨現代中国の企業形態、儀我壮一郎・林昭『現代の企業形態』世界書院、1966年3月。
- ⑩中国における国営企業管理の特質、アジア政経学会『アジア研究』13巻1号、1966年4月。
- ⑪現段階の中国国営企業と人民公社の議問題、『アジア経済』7巻4号、1966年4月。
- ⑫中華人民共和国の社会主義企業、上林貞治郎編『経営経済学』大月書房、1967年4月。

また、延安・解放区の見学の成果を含めて、単行本の形で、『中国の社会主義企業』ミネルヴァ書房、1965年1月を公刊した。前出の『現代中国の企業形態』（1959年、森山書房）の続編に当たる。

1963年の上海訪問のさいに、最も印象的であったのは、魯迅関連の史蹟であった（後述）。池

田・儀我・松野『中国革命史』（後告）のなかで、魯迅の墓の写真を収載できたことなど、当時としては、精一杯の努力であった。魯迅は、日中全面戦争開始の前年、1936年10月18日、上海の大陸新村の自宅で死去。遺体はその日のうちに膠州路の万国殯儀館に移された。22日、遺体は万国殯儀館を出発、万国公墓に葬られた。墓は、1956年10月、虹口公園内に移された。

当時、米国・「西側」の「中国封じ込め政策」が続いているなかで、大阪・神戸は、上海との歴史的諸関係が深く、東京が主として米国に向いているなかで、西日本には親中の傾向が強く、学界を見ても、現代中国学会の会員数が、当初は、東日本よりも西日本の方が多いという状況があり、京都大学、大阪市立大学、神戸大学、山口大学などが拠点であった。

2005年11月訪問したみずほコーポレート銀行の上海支店長花井健氏が大阪市立大学商学部の卒業生で私の授業でも優秀な成績をおさめ、同副支店長鈴木宏司氏が神戸大学卒業ということだったので、懐しさのあまり、次のことを話した。

「往年、日中貿易が多難を極めていた時における最初の本格的な日中貿易論の著書は、大阪市大の平岡健太郎教授（玄洋社で頭山満の先輩格に当たる平岡浩太郎氏の孫）と、神戸大学の宮下忠雄教授が、それぞれ公刊されて、開拓者的役割を果たされた（東京方面では、富山栄吉氏が先駆的役割を担っていた）。また、次のように、すでに1963年に大阪市と上海市の交流・友好の意思が、早期から確認され、関西の諸企業と上海との多様な関係の強化を促進する事情があった。現在、花井氏と鈴木氏が上海支店の中枢に居られることは、偶然ではないと思う。

顧みれば、1963年8月25日に、上海市長代理曹副市長と私が会見し、中馬馨大阪市長（現中馬弘毅行政改革相の父君）からの記念品を贈呈することができた。日中交流が困難な時期の大阪市と上海市の友好的関係の象徴であり、大阪市立大学に在職中の私にとっては、とりわけ感慨深いものであった。」

上海では、「和平飯店」に宿泊したが、1963年8月25日か26日か、早朝に窓外から歓声がきこえた。何かと質問したところ、「イギリス帝国主義者が敷設した路面電車の線路の撤去が完了した。これも主権回復・独立を証明する快挙であるから、市民が歓声をあげているのだ」と、ホテルの従業員が答えてくれた。線路撤去のあとは、トロリー・バスの運行になると説明された。歴史の一齣に立会ったという印象を記憶している。

「和平飯店」（もとキャセイ・ホテルとパレス・ホテル）の所有者はイギリスのサッスーン財閥であったが、1963年には、占有・使用とも完全に中国人の手に移っていた。イギリス人の所有権をいかに処理したか。興味深かったが、当時の答は、「懸案です」ということで、「無償没収」ではなかった。



### Ⅲ 上海における魯迅の旧居

私は、1963年の訪中以前から下記のとおり魯迅（1881－1936年）に関する小論などを発表していたが、1963年に上海で魯迅の墓・魯迅旧居などを訪問し自信をもって、⑧⑨以下を発表できたことは、幸いであった。

- ① 1956年11月 魯迅と現代一過渡的な覚え書・そのⅠ—『中国研究』（江南書院）11月号。
- ② 1956年12月 狂人文学と『狂人日記』『中国研究』（江南書院）12月号
- ③ 1957年1月 魯迅と現代一過渡的な覚え書・そのⅡ—『中国研究』（江南書院）1月号。
- ④ 1957年4月 魯迅の限界『中国研究』（江南書院）4月号。
- ⑤ 1958年10月 魯迅と辺区の建設『大安』4巻10号。
- ⑥ 1960年12月 魯迅に対する国際的関心の諸側面『大安』6巻12号。
- ⑦ 1965年3月 魯迅についての断想『住民と自治』3月号。
- ⑧ 1965年11月 魯迅—中国の革命的知識人—池田誠・儀我壮一郎・松野昭二『中国革命史』法律文化社。
- ⑨ 1969年4月 魯迅第四の転機と大学『朝日新聞』4月9日。
- ⑩ 1996年3月 魯迅三題、日中人文社会科学交流協会『交流簡報』175号。
- ⑪ 2003年3月 日中関係に関する試論『中央大学経済研究所年報』31号。

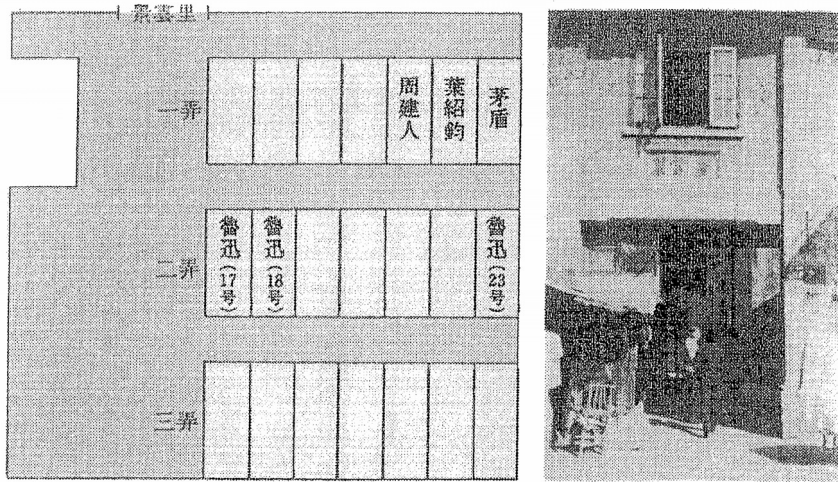
⑧は、「魯迅略伝」として葬送の日とその後までを含めて論じたものである。⑨は、魯迅が上海に移住するまでの苦闘の足どりを要約した小論であり、⑧を補完する。⑩と⑪では、夏目漱石と魯迅、河上肇と魯迅の関係を検討した。

⑨においては、魯迅の転機を、①富裕な読書人階級に属し「お坊ちゃん」育ちであった魯迅の一家没落による幼少時の転機、②救国の念を抱きつつも医学を志していた魯迅の仙台の「幻灯事件」による文学への転換、③1919年の五・四運動への参加、④辛亥革命とその挫折のなかでの進化論から階級論への転機とし、上海までの足どりを追った。

上海における魯迅の旧居は、転々としていて、単純ではない。1927年4月の蒋介石主導の4.12反共クーデターの後間もなく、文学者たちが各地から上海に集まって来た。日本人も多かった北四川路周辺から虹口一帯が文学・文化運動の拠点となる。

「魯迅は九月末広東を發ち、十月三日上海に着いた。まず愛多<sup>エドワード</sup>路長耕里（いまの延安東路一五八弄）の共和旅館に泊まり、十月八日、東横浜路景雲里二三号を借りて住んだ。北四川路の西側、内山書店のあった魏盛里から遠くない、ちょっと奥まったところにある路地（弄堂）である」（丸山昇、前出、157ページ）。魯迅は、図1の23号に入居、1928年9月に18号に移り、約半年後、隣の17号が空くと、それも借りて合わせて住んだ。魯迅と茅盾は、至近距離に住んで交流する。郭沫若も、景雲里から五〇〇メートルとは離れていなかったはずの、いまの多倫

図1 景雲路における魯迅の旧居 景雲里見取り図とその入口



(出所) 丸山昇『上海物語』157ページ。

路に住んでいたのだが、魯迅と郭沫者は、生涯ついに一度も顔を合わせることがなかった（丸山昇、前出、158－162ページ）。

1927年から29年にかけての革命文学論争を経て、1930年3月2日に左翼作家連盟が結成された。結成大会の後、国民党から逮捕令が出たなかで、魯迅はいまの山陰路に移っていた内山書店の3階に約1ヵ月住み、5月12日に、内山の世話で内山書店の筋向いのラモス・アパートA三楼四号に引越した。現在は川北公宮というアパートである。その後、1931年に花園荘に避難することもあったが、1933年4月11日に、魯迅は、施高塔路大陸新村九号に移住し、死ぬまでここに住んだ（丸山昇、前出、171－172ページ）。

さて左連関係のその後の集会を、日本人記者クラブで開くことができたのは、朝日新聞特派員尾崎秀実（1901－1944）の協力によった。尾崎は、上海で創造社のメンバーや魯迅と知り合い、アグネス・スメドレー（1892－1950）を知った。場所は、パレス・ホテルのロビーであり、キャセイ・ホテルの向い側で、現在は、キャセイ・ホテルとともに、「和平飯店」となっている。そのスメドレーの紹介で、1930年の晩秋に尾崎は、「アメリカ人新聞記者ジョンソン」と名乗るリヒャルト・ゾルゲ（1895－1944）を知った。尾崎は、1932年帰国するが、34年日本でゾルゲと再会、41年「尾崎・ゾルゲ事件」として検挙され44年処刑される（丸山昇、前出、173－175ページ）。篠田正浩監督のライフワークとされる映画『スパイ・ゾルゲ』を想起していただきたい。

上海における魯迅の50歳の誕生祝い（1930年9月17日）の会場であるオランダ・レストラン

を借りる世話をしたのは、米国の女性ジャーナリスト、アグネス・スメドレーだった。会には、田漢（中国の国歌・義勇軍行進曲の作詞者）を中心とする演劇のグループも参加していた。発起人、主要参加者、会の内容も、詳しく紹介されている（丸山昇、前出、151－156ページ）。

魯迅の旧居については、阿部正路『魯迅居断想』（創樹社、1991年）がある。1956年10月、魯迅逝去20周年に建設された北京魯迅博物館内の魯迅の旧居が紹介され、感想が述べられているが、上海における魯迅の苦闘とその旧居に関しては、論及されていない。念のため附言した。

魯迅は、死去の3年前の1933（昭和8）年、中国民権保障同盟に参加し、上海駐在ドイツ領事館において、ファッショの暴行への抗議文を手渡し、また、国際反帝反ファッショ会議の招集にも尽力してその名誉議長となるなど、病におかされながらも、一貫して闘い続けていた。同じ1933年、小林多喜二が官憲によって虐殺されたとき、魯迅は断言した。

「日本と支那の大衆はもとより兄弟である。資産階級は大衆をだまして其の血で界をゑがいた。又ゑがきつつある。／併し無産階級と其の先駆達は血でそれを洗っている。／同志小林の死は其の実証の一だ。／我々は知って居る、我々は忘れない。／我々は堅く同志小林の血路に沿って前進し握手するのだ」（「同志小林の死を聞いて」『プロレタリア文学』1933年4・5合併号）。同じ1933年1月12日に、河上肇は、東京中野区住吉町の日本画家椎名剛美方で検挙された。河上肇も魯迅も、小林多喜二も、海を越えて握手し、共通の道を踏みしめていた。一海知義氏によれば、魯迅が1928, 9年に河上肇の日本語の著書3冊を上海の内山書店で購入したことも最近知られている。魯迅も河上肇もその「経済学」「文学」だけではなく、教育、文化普及運動、政治活動などのすべてを通じて、全体像を理解する必要がある（加藤周一、井上ひさし、杉原四郎、一海知義『河上肇 21世紀に生きる思想』かもがわ出版、2000年10月、一海知義『河上肇そして中国』岩波書店、1998年など参照）。

魯迅と河上肇との関係については、すでに上記⑩⑪の別稿で詳論した。ここでは、魯迅の文学と志を知るために、魯迅自身の業績について、手がかりを記しておきたい。

魯迅が遺した著作・翻訳は、漢字で700余万字にのぼる。『魯迅全集』と名の付く著作集は、彼の死後、1938年、58年、73年、81年の四度出版された。とくに1981年の生誕100周年を記念して刊行された『魯迅全集』全16巻は、書簡・日記にいたるまで全作品に計2万3000条項の注釈がほどこされ、この作業に約10年を要した（丸尾常喜『魯迅』集英社、1985年、9－10ページによる）。

魯迅の著作の日本への紹介は、丸山昇・丸尾常喜編『魯迅関係図書目録（日本出版）』（内山書店、1999年12月）によれば、戦前・戦中の1931（昭和6）年の『阿Q正伝』（松浦珪三訳、白揚社）、『支那小説集・阿Q正伝』（林守仁訳、四六書院）に始まる。『全集』『選集』などと題するものの翻訳のみを見ても、次のとおり多数にのぼる。

(戦前・戦中) ①『魯迅全集』井上紅梅訳、改造社、1932、②『魯迅選集』佐藤春夫・増田渉訳、岩波文庫、1935、③『大魯迅全集』1～7、井上紅梅・松枝茂夫・山上正義・増田渉・佐藤春夫・鹿地亘・日高清磨嵯・小田嶽夫訳、改造社、1937。

(戦後) ④『魯迅選集創作集』1・2、田中清一郎・小田嶽夫訳、青木書店、1953、⑤『魯迅選集雑感集』1・2・3 田中誠一郎・岡本隆三・尾坂徳司訳、青木書店、1953-54、⑥『魯迅選集』(全13巻)、増田渉・松枝茂夫・竹内好編集・翻訳、岩波書店、1956 (1964増補改訂版)。

⑦「魯迅選集」1～5、小田嶽夫・田中清一郎・岡本隆三・尾坂徳司訳、青木文庫、1963、⑧『魯迅作品集』1～3、竹内好訳、筑摩書房、1966、⑨『魯迅文集』(全6巻)、竹内好訳、筑摩書房、1977-78、⑩『魯迅全集』(全20巻)、伊藤虎丸・北岡正子・伊藤昭雄・林敏・丸山昇・丸尾常喜・飯倉照平・立間祥介・本山英雄・相浦杲・中川俊・是永駿・井口晃・松井博光・中野清・三木直大・竹内実・吉田富夫・前田利昭・近藤龍哉・佐治俊彦・松永正義・片山智行・三宝政美・太田進・今村与志雄・岩城秀夫・岡田英樹・笈文生・入谷仙介・伊藤正文・山田敬三・萩野脩二・辻田正雄・釜屋修・佐藤保・尾上兼英・小南一郎・藤井省三・芦田肇・小谷一郎・中島長文・坂井東洋男・深沢一幸・阿頼耶順宏・渡辺新一・鶴島俊一郎・山口守・木之内誠・南雲智・飯塚容・岩崎葉子・尾崎文昭・他訳、学習研究社、1984. 86. ⑪『魯迅文集』〈ちくま文庫〉1～6、竹内好訳、筑摩書房、1991。

まさに壮観である。ひとりの作家の『全集』『選集』などが、これほど多数かつ多様な形で翻訳紹介される例は、中国の作家はもとより、欧米・ロシアなどを含む諸外国の著名な作家についてみても、類例少ないものと思われる。また、諸外国における魯迅の翻訳紹介と日本の場合を比較しても、日本が、きわめて多数の研究・回想などを含めて量質ともに極めて高い水準にあることは、疑いない。ここに列举された訳者の多くは、それぞれにすぐれた「魯迅論」を発表している。

私は、今、大阪市立大学在職中に、魯迅の最後の直弟子である文学部の故増田渉教授から、もっと多くの御教示を得たかったと後悔している。しかし、幸いに大阪市立大学が、その後も、魯迅研究の重要な拠点の1つであることは、嬉しく心強いことである(増田渉『魯迅の印象』大日本雄弁会講談社、1948年、〈角川新書版〉角川書店、1970年、伊藤漱平・中島利郎編訳『魯迅・増田渉師弟答問集』汲古書院、1986年、姚文元『魯迅』片山智行訳、潮出版社、1973年、片山智行『魯迅のリアリズム「孔子」と「阿Q」の死闘』三一書房、1985年、同『魯迅「野草」全訳』平凡社、1991年、同『魯迅 阿Q中国の革命』中公新書、1996年など参照)。

2006年、姚文元が死去した。その父親の揚華は、1930年の左連結成のさいに魯迅とともに参加している。感慨なきを得ない。